

## 201101八栗シオンキリスト教会礼拝宣教アウトライン ルツ記1章「あなたの神は私の神」

### 1. 飢饉、夫と息子の死 1-5節

#### 1 「さばきつかさが治めていたころ」

- ・ルツ記は士師記の時代に位置する。
- ・最後のさばきつかさはサムエル。その後は王制に移行し、サウル、ダビデ、ソロモンが王として立てられていく。
- ・ルツからオベデが生まれ、その後、エッサイ、ダビデと続くので、ルツ記はさばきつかさの最後の時代であると考えられる。1150年頃か。

#### 〈イスラエルとモアブの関係性〉

- ・イスラエルとモアブの関係には二面性がある。「類縁関係」と「神の民と異邦人の違い」。
- ・モアブはアブラハムの甥のロトの子どもであり（創世記19:37）、主はイスラエルにモアブと敵対しないようにと言われた（申命記2:9）

**Deut. 2:9** 主は私に言われた。「モアブに敵対してはならない。彼らに戦いを仕掛けてはならない。あなたには、その地を所有地として与えない。わたしはアルをロトの子孫に所有地として与えたからである。

- ・しかし、その一方で、モアブ人（とアンモン人）は主の集会に加わることを禁じられている（申命記23:3）。ここには神の民と異邦人の違いが見られる。

**Deut. 23:3** アンモン人とモアブ人は主の集会に加わってはならない。その十代目の子孫さえ、決して主の集会に加わることはできない。

#### 〈イスラエルとモアブの歴史〉

- ・モーセは、モアブの北の領域を取り、ガド族とルベン族に与え、町を再建させた（民数記32:34-38）。
- ・士師時代に入ると、モアブは領土を回復して、イスラエルに抵抗するようになった。モアブの王エグロンはアンモン人やアマレク人と連合して、エリコを占領し、イスラエルは18年の間、そのくびきの下で苦しんだ（士師記3:12-14）。この時、エフデがイスラエルの救助者として起こされ、モアブの軍隊を打ち破った（士師記3:15-30）。
- ・このようにイスラエルとモアブの間には戦いの歴史がある。しかし、イスラエルとモアブは民族の出自では類縁関係にあるので、カナン人やペリシテ人とは違う「近さ」があるのも事実である。
- ・ルツ記の時代は、両国の関係は比較的穏やかであったと考えられる。なぜなら、飢饉の難を逃れるためにイスラエルからモアブに避難したことは、両国の間を自由に行き来できたからであり、また、イスラエル人がモアブ人を妻に迎えることもできたから。

#### 1 「そこに滞在することにした」

- ・「滞在」だから一時的な居住。しかし、結局、10年間滞在することになった。
- 人生何が起きるか分からない。

#### 2 「エリメレク」

- ・「（私の）神は王」という意味。

#### 2 「ナオミ」

- ・「よい」という意味。(1:22から)

## 2「マフロン」

- ・「弱い」という意味。

## 2「キルヨン」

- ・「弱さ」「脆さ」という意味。

## 2「ベツレヘム出身のエフラテ人」

- ・エフラテはベツレヘムの別名(4:11、ミカ5:2)。
- ・二人の息子について詳細な情報が記される。

**1Sam. 17:12** さて、ダビデは、ユダのベツレヘム出身の、エッサイという名のエフラテ人の息子であった。エッサイには八人の息子がいた。この人はサウルの時代には、年をとって老人になっていた。

- ・彼らはダビデと同じベツレヘム出身のエフラテ人であった。

## 3「残された」

・この語が再び5節で繰り返される。ナオミが一人残されることが読者に印象づけられる。ナオミの孤独や悲しみが滲み出る。

## 4「オルパ」

- ・名前の意味は不明。

## 4「ルツ」

- ・名前の意味ははっきりしない。①軽食②友情。二つ目の意味か。

## 4「彼らは約十年の間そこに住んだ」

- ・この後の展開からも、二人の息子たちには子どもがいなかったと思われる。

## 5「息子」 בן

- ・「少年」「子ども」を意味する語。それが既婚者の息子たちに使われている。珍しい使用法。
- ・理由①「その子」(4:16)との間にインクルージオが形成されている

②母の喪失の悲しみの痛烈さを表現するのにבן“son”ではありきたりの表現である

・ルツ記はナオミが息子を失うことに始まり、孫を得ることで終わる。その構造から見ると、インクルージオという理解はあり得る。また、3節と5節でナオミが「残された」ことが繰り返されることから、ナオミの孤独や悲しみが言外にニュアンスとして感じられると見れば、こうした意味も含まれているとも否定はできないだろう。

## 5「ナオミは二人の息子と夫に先立たれて、後に残された」

・当時、女性が夫と息子に先立たれ、しかも、孫がないという状態は、社会的な死を意味した。まさに「未亡人」というのにふさわしい立場だった。ただ「残された」と簡潔に記されることで、かえって絶望の深さが表れている。

## 2. ルツの固い決心 6-18節

9「新しい夫の家で安らかに暮らせるようにしていただきますように」

- ・モアブ人の義理の娘がベツレヘムに戻ってきても再婚の可能性は難しいとナオミは考えた。事実、この後、ルツは最初に買い戻しの権利のある人からは拒絶された。
- ・当時の女性には仕事がなく、夫や息子を失ったらそれは社会的な死を意味した。若い彼女たちの生き延びていく道は再婚よりほかなかった。

〈11-13節〉

**Deut. 25:5** 兄弟が一緒に住んでいて、そのうちの一人が死に、彼に息子がいない場合、死んだ者の妻は家族以外のほかの男に嫁いではない。その夫の兄弟がその女のところに入り、これを妻とし、夫の兄弟としての義務を果たさなければならない。

〈16-17節〉

- ・ナオミは義理の娘たちの今後の生活のことを気にかけてたが、ルツはナオミとの関係こそ大切に見ていた。約10年の生活を通して、ルツはナオミから大きな影響を受けた。宗教的感化も受け、それが「あなたの神は私の神」という発言として出たのだろう。

## 3. ベツレヘムへの帰郷 19-22節

20「私をナオミと呼ばないで、マラと呼んでください」

- ・マラは「苦い」という意味。
- ・神がナオミを大きな苦しみに合わせたとナオミは理解した。ナオミは神の手が自分に下ったと受けとめた。

21「私は出て行くときは満ち足りていましたが、主は私を素手で帰されました」

- ・ベツレヘムからの出発と帰郷を対比している。満杯で出ていき、空っぽで戻ってきた。主がナオミの手からすべてを奪い取ったとナオミは受けとめている。

22「大麦の刈り入れが始まったころであった」

- ・収穫期の初め。まず大麦の収穫から始まる。4月頃。これは第一の月にあたる。過ぎ越しの祭、種を入れないパンの祭りの後、収穫の初穂を献げる。
- ・2章への橋渡しとしての役割を果たしている。